

「 母の経験から考えたこと 」

宮崎県 都城泉ヶ丘高等学校附属中学校 3年 二木 結衣

今年の春、家族と一緒に母方の祖父母の家に行った。祖父母の家は高千穂にある。秋になると栗がいっぱい実る木のある山があったり、季節に応じていろいろな野菜を作る畑があったりおいしいお肉になるよう育てられている牛がいたり、道をすれ違う自動車のほとんどが白色の軽トラックだったりする自然豊かなところだ。私たち家族は、祖父母の家で3日間過ごした。

2日目の昼。私は母と兄と一緒に、祖父母が飼育している牛にミルクを飲ませるために牛小屋へ向かった。その帰りのこと。道の途中で木造の古い倉と、今は使われていないようなプレハブの倉庫を見つけた。「何だろう。昔誰かが使ってた倉庫？」初めて見る2つの建物が妙に気になって、母に聞いてみた。

「ねえ、この建物って何？今もこの建物は使われているの？」

「木造のほうは今も使っているお米の乾燥室で、プレハブのほうは前の家が潰れた後に建てた仮の家で、今は物置と休憩所になっているよ。」

母はそう教えてくれた。

「え、潰れたの？家が？」

潰れた、という言葉に私と兄は思わず聞き返した。

「うん。お母さんが小学校1年生のときに土砂崩れで家が潰れたんだよ。」

そう言って母はそのときに起こった出来事をおもむろに話し始めた。

(母の話)

今から40年前。7月25日午前4時50分頃のこと。寝ていた私は、家の揺れとお父さん、あなたたちのおじいちゃんの「もう一度来るぞー！」という声で目が覚めた。でも夢かと思って再び寝ようとした数十秒後。

「寝ている場合か！早く起きろ！山が崩れるぞ！」

とたたき起こされた。おじいちゃんの前想どおり、どんっ、と音を立て2回目は起こった。私が寝ていた2階は無事だったけれど、1階は窓ガラスが割れ、土砂が入り、家の中は一面茶色。家具は倒れ、天井が落ちていたところもあり、裸足ではとても歩けない状態だった。私はひいおじいちゃんに抱っこされて、やっと家の外に出た。崩れた裏山、斜めにかしいだ自分の家。1階の天井はひいおじいちゃんの車に刺さっていた。今でもはっきりと目に浮かぶ。恐ろしいあの光景は、忘れられない。

数日後、近所のおじさん数十名ががれきの片付けを手伝ってくれた。私の新しいきれいなランドセルは少し汚れてしまっていたが、ランドセルが私の手元にあることが嬉しかったよ。また、「家に泊まっていいよ。」と言ってくれる人、仮設の家作りを手伝ってくれる人など、地域の人がたくさん助けてくれて、本当に嬉しかった。

母の話聞き、自分や家族の身を守る「自助」、地域の人たちと支え合う「共助」の大切さが身に染みて感じられた。もし自助をしなかったら、母たちは誰も生き残っていなかったかもしれない。もし、共助がなかったら、片付けや家作りは思うように進まなかったかもしれない。

私は、土砂災害から自分の家族、地域の人々の身を守るため重要なことが2つあると思う。

1つは、土砂災害ハザードマップを確認することだ。土砂災害ハザードマップには、土石流、崖崩れなどが起こる危険性のある場所や、避難場所が記載されている。これを家族と常時確認すれば、土砂災害が起こりそうなときに冷静に判断できる。更に、もしものとき、すぐに逃げられるように実際に避難場所まで歩いて道を覚えるとよいと思う。

2つ目にあげたいのは、地域の人とコミュニケーションをとることだ。コミュニケーションで直接土砂災害を防止することはできない。しかし、コミュニケーションがあれば、被害を最小限に抑え、はやくもとの生活に戻ることができると思う。例えば、地域の人と、

令和4年度 「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞(事務次官賞)

「あそこの山が崩れそうだ。」

「川の水が濁っているから気をつけよう。」

といった情報交換や呼びかけを行うことはできる。それにより、土砂災害が起こる前に避難でき、人的被害を減らすことができるだろう。また、お互いが知り合いであれば、一緒に助け合っているという思いもより強くなるかもしれない。

母がそうであったように、土砂災害はいつ、どこで誰の身に突然起こるか分からない。だからこそ、土砂災害が起こる前に対策をすることが必要ではないだろうか。自分や家族、地域の人を守るために、自分にできることから備えていきたい。